



頴猿蓑

上

伊地知文庫
文庫20
343
1



續猿蓑

上

伊地知文庫

文庫20

343

1

蓑

續

文庫20
343
1
5

一冊二

三冊

一冊

續猿蓑集卷之上

ハねらるるてはゆはるはねる

芭蕉

まきのうしはたふちあはる

沾圃

ゆきとら馬もこのこに羽織

馬寛

心をやまてつゝ晩のゆきまひ

里圃

まのふらふらおとまら月の色

沾

物脊うらねてぬをうたはる

蕉

伊地知氏書冊



淡柿もも〜を流に吹れり
 孫、跡とら 祖父より借渉
 服指に替ておろる孫 刀
 煉ふ志あつてもや孫の眼
 孫衆の小きも一さげ賣にま
 十里をうらひ余所へあつて
 母の志ふに少海埋ておろる
 阿の島ししとふしりの書つ新

里 葛 蕉 佐 里 葛 蕉 佐 里 葛 蕉

所々、後を海にたまに揚揚と
 あつて、やうも及、系のをつれ
 みのりあつて、花のよめてあひて
 足らぬたらうも、物のまへに
 またす、あつて、あつて、借をま
 伊路の下向に流るるあつて
 也、孫の、小、筆、能、伸、り、そ、こ、こ
 へ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ

里 葛 蕉 佐 里 葛 蕉 佐 里 葛 蕉

後集

禪寺に一月あふ砂のよ
 榎のうらりたるぬき丸
 後わいの半に傳ふもや
 ちねぬぬみきうすの
 月待の侍やまのころひ
 雛のうきをいふはし
 中れて来てあおもねも
 付保まーちかろりわん
 星 蕉 沓 覓 里 蕉

都やにきり坂のみの風
 おゆいに空のさちれう
 立ちて町に輝きまを
 そ川と火入よおとれ
 花をまゆみぬきまの
 漸かーらのちちかろふ
 星 蕉 沓 覓 里 蕉

馬寛

雀カウの字や拵めてほろもりのあま

てりまぶの岸の柳カウもり

さうぶを四つてもいれぬ秋カウまで

好川カウししやうのそく月酒

おれまゝからカウかきかへぬも

遠まゝらカウておの洗足

沓圃

里圃

寛

佐

里

悔はさうおのしきのこころをひ
 懐懐とんとてまをらあつとら
 あつとら後まのち氣はつ
 ちゆりまらるる固方乃客
 何まもたてめてはた弱く迷
 風よこめすからお輪の輪の月
 意新し秋のほろあふはて
 二羽はのさよとあはる呼はり
 佐 寛 里 浜 寛 里 佐 寛

明らら伊勢の幸洲のちり一花り
 世寒をまらりしれりぬ一花
 信まもまらりし言言はるる
 まる静がら草一乃 係纏
 雪の海を雪は掃かす
 まるぬ合点てかめてはら
 手ししたるられとち中あつ
 と静寂かまのさのこころや
 佐 寛 里 浜 寛 里 佐 寛

汁のさきよふらうらうら子のおもて
あしうらまきさう川刈てと皮
にしに寺の栴圖をさあし
厚のおさきらうあまを掛し
張らりてさうさうぬ小高
早下してなよよの軒
肌入て秋にやうりりさの月
露よとちちるくうら世の玉液

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

けし盛を寶の母おと向て
み付てたりあ相らさる
重のまねれい離子附のさうひお
すて乳味あまい枚蒲の風
るのうけをむび立縮子の癖
あう田の土のがうけうけ

里 佐 苺 里 佐 苺

70
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...
あまのさき...

里圃

佐圃

芭蕉

馬寛

法

里

知思後の響り此等極りて
 流々此等を観わゆる
 廻の極よあるまうけたり
 月利てはぬをよるまうけり
 此等を駿河の飛脚種とり
 やうこせいのをさうぬりの乾
 平のまうけよるまうけの流り
 伊勢氣つゝめ綿とりの面
 佐 寛 里 佐 寛 里 流 寛

うき猿を眺とつれまはるる
 此等ゆるゆるゆるゆる
 某舟の元の申よりほらとて
 極の傍へ行くまうけり
 百地よちりてせらるるまうけり
 こまの丸を膳よあゝあに某
 責おの流線はこちり
 りかのおつゝまうけり
 佐 寛 里 佐 寛 里 流 寛

後表

砂を^{ギス}ま^スの藤の中^の終線^の
ふもく^のく^のひ^のを^を 江
火燧の火^のつけて^て携^てて^て志^を
一^のふ^の〜^の 唯^のり^の来
折^の〜^の 窓^の月^のの^の起^る〜^のま^を
御^に加^へ減^らり^のち^のあ^のお^のを^を
月^の夜^のみ^の〜^のい^のと^をひ^のか^て
お^のひ^のの^のあ^のの^のお^のの^のお^のの^の

里 佐 克 里 佐 克 里 佐

手^の拂^のみ^の娘^のを^をや^のい^のて^の娘^のの^のさ^を
〜^のあ^のの^のさ^をを^を〜^のら^のて^のは^を
〜^のの^のあ^のと^の躑^の躑^のの^の〜^のた^をと^を
寺^のの^のひ^のけ^の〜^のら^の山^のの^のま^をを^を
冬^のより^の冬^の〜^のら^の〜^のら^のの^の甲^を
一^のの^の降^のて^のあ^の〜^のら^のの^の風

里 佐 克 里 佐 克 里 佐

猿蓑にもれとちおねのねを海に
身を空よりれと静やう 芭蕉
水かき池のゆらりるありて
い藤竹まはけをいひぬ
鶴あうらわやうてさきの月
つるさし孔わらふをうらふ秋

治圃

芭蕉

支考

惟然

蕉

考

魚志すい一荷てまゝさる筋の魚
 空を採の癖をとりまゝきり
 舞々来てゆいともせきり物後
 中園ありの杖のまゝ左を
 朔日の月をさそくやう振舞
 一きり相織り失てまゝゆめら
 きさやなまゝまゝの比の根根
 さらば門あらぬの月
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

神あり一烟の人のうけおと
 ぬ像光る淡りや翳
 んてまゝる記と并を花の笑か
 肩抜ひとりまゝゆゑ水き日
 さら風の又る細み如北にやうり
 わら手に脈をちるまゝゆゑ
 後陣の内保らとるな居家
 喧嘩りまゝも河まゝとせぬぬ
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

後集上

大せ川なほう二なるをさ書のの種
 雪うさふ——中のところを
 来る程の糸掛をさるや家立
 團のせを垂をさるの他
 酒より七有のやまふ月足て
 赤鷄頭をさるる 西面
 さうね娘のさるるなを川を
 藤原のさるるさるるのさるる

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

もり花をさるるさるる松の風
 大さつうひの團のさるる
 束搦もさるるさるる
 うさめてさるるの平を押あふ
 けあさるる油をさるるのけも
 鴨の油のさるるさるる

蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考

後集

三

